
ショートショートの館

新次元

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨートシヨートの館

【コード】

N0331J

【作者名】

新次元

【あらすじ】

シヨートシヨート。全て独立した物語。どこから読んでも大丈夫。

HP <http://2minutesblend.web> .

fc2.com/

[mail contravent@hotmail.co.jp](mailto:contravent@hotmail.co.jp))

を@にしてください)

死ぬために殺してきたのかもしれない

俺は猟師をやって、もうかれこれ十年にもなる。一番苦勞したことがなんだってか？ そりゃあ、毎日が苦勞の連続さ。そんなことよりお前さん、俺が最も嫌だったことを語らしてくれ。

狩猟に出かけたことのない都会の若造なんかと一緒に猟に行った時だ。何回かそういうことがあったけど、毎回嫌なことをぬかしやがるのさ。

猟銃をぶっ放して熊を殺した後、皮を剥いていると、「かわいそう」だの「よくそんなことができますね」とか。果ては、ゲロツちまう奴まで出てくる始末。別に俺はなんも悪いことしてねえのに、そんなの見てると罪悪感が湧いてくるってもんよ。

今の若者は殺して食わないから、そういう考え方をするんだろうさ。命を大事にするために肉食主義を貫くなんて、俺から言わせりゃとんだうつけ者よ。

しっかしまさかその肉食主義者が、手近にあった大きめの石で俺の頭をブツ叩いて、殺してくるとはなあ。熊に狙いを定めていて背後が疎かになったところをやるとは、俺以上の猟師じゃないか。けど、結局あそこに残ったのは熊と殺生を非道と捉える肉食主義者。はてさて、あの後どうなったのかねえ。

世界連動毛髪

世間が砂漠化の急激な進行に頭を悩ませていた頃、和雄は本格的にハゲ始めていた。

彼は試しに発毛剤を塗ってみた。和雄の頭皮とそれは大変相性がよく、半年足らずで髪が復活した。

するとどうということだろう。砂漠化はピタリと止まり、森林や水が舞い戻ってきた。もしま、と思い、和雄は発毛剤を止めてハゲに戻ってみた。世界の砂漠化が再開した。発毛剤を塗る塗らないをいくら繰り返しても、同じ結果を得る。こうなると、己の頭と世界が連動していると信じざるをえない。ゆえに、和雄は頭の手入れを欠かさなかった。

世界を苦しめていた公害も、たちどころに消えた。

これは面白い。そう思った和雄は、金を稼ぐため新興宗教を始めることにした。入信者を集めるのは容易かった。世界の破滅がそろそろ来ると言い、すぐに発毛剤の塗布を止めるのである。たちまちの内に、世界の森林が消えかかる。そして今度は逆に、私が世界を救うと言い、発毛剤を塗る。やがて森林が蘇る。

何度か繰り返していると、入信者が増え、上納金もたくさん集まった。

全てが順調かに見えたが、ある日、見ず知らずの女に包丁を突き付けられ、人里離れた山小屋に監禁された。なんでも自分の旦那がサラ金から借金してまで、和雄に貢いでいたらしい。

くたばるまでここにいろ、と和雄は言われた。水も食料も与えられず、和雄は死んだ。数週間が経ち、彼の頭に蛆虫が湧いた。

地球上に巨大な虫の生命体が現れた。世界は滅びた。

ガシャポン彼女

私は、度重なる整形手術を経てこれ以上ないくらいの美貌を手にした。多くの男が、私をものにしたいたいことだろう。

ある日私が歩いていると、ガシャポンの前で泣いている女の子がいた。どうしたの、と声をかけると、百円玉を落としてしまい、ガシャポンが買えない、と言う。

かわいそうに。財布を見ると、ちょうど百円玉が一枚あったので、彼女に与えることにした。女の子は可愛らしい、しかし舌足らずな声で、ありがとう、と言ってくれた。

女の子は、嬉々としてガシャポンのレバーを回す。ガコン、という音がして、カプセルがでてきた。

それを手に取ると、女の子の顔は急に曇った。ダブったからこれ要らない、と言って、すたこらさっさと逃げるようにしてどこかへ行ってしまった。カプセルを開けてみると、大変可愛い着せ替えフィギュアだった。

それから数日後、私は拉致され、人身売買にかけられた。相当な高値で売れると人売りは笑っていた。しかし意外にも私は安値どころか、売れもしなかった。どうやら、私の顔は最近どこでも見かけるようなものらしい。

遺失物自分

「すみません、『自分』を見失ったんですが、こちらに届けられていませんか？」

交番に入るなり、聡美が尋ねた。

「『自分』ですか……」

年配の警官が、悩ましげに、うーん、と唸る。

「どんな色です？」

「少し明るい緑で、白い線が、うつすらと入っています。形は、今ひとつわかりません。いつも崩れていましたから。もう、それがなにと、私、絶望で満たされて、満たされて……」

聡美が、うう、とその場で泣き崩れる。警官は、まあまあ、落ち着いて落ち着いて、と彼女をなだめ、彼女の中に広がる『絶望』を追い出そうとした。

涙こそ止まったものの、彼女の中にある冷たい『絶望』は消えてくれそうにない。

「少しパソコンで検索してみましようか」

警官は、椅子に腰かけ、パソコンのキーで『自分』『明るい緑』

『白い線』と打ち込んだ。

検索結果は、零だった。警官は、舌打ちしてから、今度は検索範囲を広げてみた。すると、いくつかでてくる。

「少し待って下さいね」

警官は、奥へ引っ込んだかと思うと、何かが一杯詰まったバスケットを持ってきた。

「この中に、『自分』はありますか？」

「う、うーん、あ、これかも？」

聡美が手を伸ばし、少し明るい緑、『希望』を取った。

「あっ！」

警官が短く叫ぶや否や、手錠を彼女にかけた。

「そ、そいつは、所持禁止第二級指定物だ」

「え？ なんです、それは？」

「知らないのか？ 今年施行された法律さ。全くとんでもないものを……それが『自分』とは、お前は危険人物だ！」

「そ、そんな！ 無茶苦茶ですよ！」

聡美は手錠をされたまま逃げだそうとしたが、

「おっと、そうはいくものか」

と警官が、バスケットから取り出した『疲労』で彼女を縛り上げた。

「おおーい、誰か来てくれ」

警官が言つと、奥から婦警が現れた。

「あ、あなた達には、『寛容』というものがないんですか？ たとえ、『希望』の所持が駄目だとしても、そんなのおかしいでしょ？」

聡美がそう訴えると、

「『寛容』？」

と婦警が、首を傾げる。

「ああ、そいつは三十年前に、所持禁止第一級指定物に認定された、極めて危ない代物さ。君が知らないのも当然だよ。それにしても、こいつ、かなり危ない奴だな。早いとこ異世界送りにしてしまおう」

気づくと、聡美は暗い暗い宇宙の中を漂流していた。無人ロケットにつめられ、どことも知れぬ異世界へと送られるのだ。しかし、これは彼女の作戦通りであった。

異世界でならば、きっと『自由』は束縛されていないはず。そこでなら、『自分』探しも比較的楽になるはずだ。あえて、『希望』を手に取ったのは、彼女の計算の内だったのである。

しばらくして、ロケットはある惑星に到着した。そこには、幸運にも人という生物が存在していた。嬉々として、彼女は『自分』を探し始めたのだが、すぐさま警官に職務質問され、そして今、牢獄に繋がれている。

「やれやれ、『絶望』を持つ者がまだいたとはな」
看守が、怪物でも見るように、聡美へ視線を向けた。

流行追い

ある国の人々は、流行追いが大好きでした。もちろん国王も流行追いが大好きで、流行を追わねば死刑に処す、という法律を作ったほです。

さて、人々が流行に乗り遅れないように目を光らせていたある日のことです。伝染病が流行りだしました。これに乗り遅れては駄目だ、とばかりに人々はこぞって伝染病に感染し、次々と床に付し、死んでいきました。

中には、さすがに命を懸けてまで流行を追いたくない、と考える者もいましたが、そういう人は処刑執行人の手によって斬首の刑に処されました。

「やれやれ、なんとか助かったわい」

国王は王室にこもり、人との接触をずっと避けていました。幸い今回の伝染病は空気から感染するものではなく、皮膚で感染するものなので、国王は一命を取り留めたのです。

「いくら流行追いが好きなわしといえども、やはり命あつての流行

」

扉が嫌な音を立てて軋んでいます。そうかと思うと、次の瞬間に扉は破壊され、誰かが入ってきました。処刑執行人です。

「では、職務を遂行します」

「ま、待て、わ、わしは」

しかし処刑執行人は忠実に職務をこなし、続いて最後の任務として自分の命をも断ちました。

この国から人はいなくなりました。

無限の雨男

青年は、頭を垂れて我が家へと足を運んだ。どうして、自分が行く場所、行く場所に雨が降るのだろうか。なぜ、神様は僕をこんな風に創ったのだろうか。青年は、泣いた。悔しくて堪らない。確かに、自分が行く所に雨が振るのは認める。それに、なぜだか自分の父もそうだったらしい。しかし、青年が産まれてからと言うもの雨男ではなくなった、と父は言っていた。

「そう言えば、父さんの父もそのようなことを言っていたなあ」
青年はまだ自分は結婚していないことに溜息を吐いた。

「そんなの無いって。たまたまだよ、たまたま」

初めて青年に会う人は皆一様にそう言うが、すぐにそうは言わなくなる。本当に雨が降るからである。そういう人生がずっと続いてから、とうとう青年は我慢できなくなった。

「僕は、もう日本にいるのは嫌だ。どこかに行こう。そう、そここそ文明の発達していない国へ。そこでなら雨が降っても文句を言われるようなことはないだろう」

青年は、日本を出た。

「さようなら、日本」

青年は、二度とそこへ戻る気はなかった。もう沢山だ。

言葉こそ通じないが、青年は原住民と打ち解けあった。原住民達は、青年を受け入れたがった。その土地で雨が降ることは珍しく、やはりここ最近も日照りが続いているのだから、当然のことだろう。もちろん、青年が来てからというもの奇跡の恵みとまで言われた雨が、普通に降るようになった。いつしか青年は生き神として崇め

られ、その地に住む原住民の統率者の娘と結婚した。

一方その頃の日本では日照りが続き、青年の帰還をあらゆるメディアを通して報道した。しかし、青年がそのような情報を受け取れるはずがない。なんとといっても、彼の住む国にはテレビもなければ、新聞もないのだから。

あれから、五年。青年は、子供を授かった。かわいらしい男の子だ。すると、青年は雨男ではなくなった。代わりに、赤子に雨男の力が移った。

そうして、代々青年の雨男の性質は伝わり、その国は発展していった。それに反比例するかのように日本は衰退し、ついにはその国の文明は滅び、原住民のような文明と化した。一方で、青年のいた国は繁栄した。

「この雨男！」

「お前が、いるから雨になっちまったじゃねえか！」

そうして青年の子孫である青年は、その国から去った。彼は、日本へと

強制的宇宙放浪

男は、身動き一つ取れないでいた。苦しい。男は、外を辛うじて見ることのできる手段である窓をちらりと見やった。

いつまで、俺は流されるのだろうか。男は、そうぼんやりと思っただ。死ぬこともままならぬ空間。男は、宇宙をロケットに乗り彷徨っていた。行き先などどうでもいい。というより、男にロケットは操縦できないのだ。このロケットには人工知能が搭載されており、男の意思に関係なく適当に何処かへとただひたすら進む。

最初、男は宇宙へ出た興奮と宇宙の風景に見とれていたが、それも今では過去の遺物となった。

狭苦しい。飲食料は無尽蔵で自動的に男の口へと運ばれるので、餓死することもない。

「ほんと、嫌になっちゃうぜ。飲食料無尽蔵ってのはありがてえ。飢え死には相当苦しいだろうからな。だが、このまま暇だと気が狂っちゃうわあ」

男は、けつたくそ悪いと喚いて床へ唾を吐いた。その唾を床が回転して自動掃除機が出現し、その唾をきれいに拭い取る

「ああ、マジで頭が変になりそうだ。動くこともできねえし、暇だしこのまま俺は死ぬこともできず、ずっと宇宙空間を彷徨うのか！これなら、地球で死んでいた方がマシだぜ」

男は、地球にいる人々を呪った。

「俺は、何も悪いことしてねえっつーの」

男が、宇宙空間を彷徨ってから十年が経過した。男を乗せたロケットは、運良く謎の惑星へ不時着した。

「た、助かったぜ」

本来なら、不時着はありえない。ロケットに搭載されている人工

知能は、未知の星及び既知の星には着陸しないようにプログラミン
グされている。しかし、十年という長い歳月が経ち、何らかの不具
合が生じたのだらう。男は気楽にもそう考えて、早いところ不時着
した惑星の住人か何かを迎えに来てくれはしまいかと期待して待っ
た。

待つこと数分。たったそれだけで、惑星の住人が数人来たらしく
外で音がした。

「助かったぜ。どうやら、この惑星には頭のいい生き物がいるな」
まもなくして、ロケットのドアがこじ開けられて、身動きの取れ
ない男を救出した。

「わ！ わ！ 俺に触るんじゃない！」

その宇宙人の肌は、ぬめぬめしており棘だらけで、口には鋭い牙
があった。男は、命の恩人である宇宙人を払い退けた。

「このぬめぬめ野郎が！」

男が宇宙人を殴りつけると、いとも簡単にその宇宙人は死んだ。
それを見た仲間の他の宇宙人は男を危険生命体と見なしてレーザー
銃で撃ち殺した。

「危ない奴だ」

「うむ、それよりこの乗り物が何処のものか解るか？」

他より棘の少ない宇宙人は、ロケットの材質を調べてからこう答
えた。

「おそらく、この乗り物はチキユウとかいうところから来た乗り物
のようだ」

「そうか。きつとチキユウには、このような危険生命体がつようよ
しているに違いない。我々の生命に危険が及ぶ前に、チキユウにミ
サイルを撃とう」

その惑星から地球に向けて、核ミサイルの数百倍の威力を持つエ
ネルギー弾が放たれた。死刑制度を撤廃し、代わりに罪人を永遠に
宇宙空間へと放ち続けていた地球はあっけなく滅びた。

加奈子。芳美のクラスにいる女子である。しかし、一体どういうことだろうか。なぜ、人の名前が、出てくるのか。それに、この加奈子というのは、『あの加奈子』のことを指しているのだろうか。彼女は、堪らずに『加奈子の苛立ち』を調べてみた。すると、意味が表示される。

加奈子の苛立ち（苛立ち）

？ 他人の不細工な様を見て怒ること
？ 男が話しかけてきたのを不快に思うこと

まさか、あの加奈子に限ってそんなことがあるはずはない。芳美は憤慨して、電子辞書を閉めかけたが、そこでふとあることを思い出した。

加奈子が男子に話しかけられている時、彼女の眉が極僅かながらもひそめられていることを。

この辞書は、もしかしたらとんでもない代物なのかもしれない。彼女は、慌てて他の語句も調べてみた。すると、驚愕の事実が次から次へと顔を覗かせる。

父が、実は昇進に燃えており周りを蹴落としているということ。

母が、数多の男を手玉に取ってきたこと。

担任が、学校の金庫をよく物色するということ等々。

「最高よ！」

彼女はそれからまあ、キーを叩き続け、周囲の人間の秘密のほとんども知ってしまった。

「ちょっと待って……。私はどうなのかしら？」

気になったので、彼女は自分の名前を調べた。だが、検索結果は零であった。

「変ね」

彼女は、それに対して何の疑問も持たずに電子辞書を愛用し続けた。もしかしたら何かを調べている内に、関連語句が何かで自分の

名前を見付ける時がくるかもしれない、と思ったからである。だが五年経った今でも、自分の名前を目にしたことはない。

「あ……あ……」

彼女の思考を、ある悲愴的な考えがよぎる。もう一度考えてみる。しかしながら、それは間違いなかった。

「私は、何の特徴もない人間なんだわ。だから、辞書でいくら調べても出てこないのよ」

芳美は、マンションの屋上まで行った。電子辞書を傍らに置き、飛び降り自殺を計ろうとした。

「止めて！」

いつの間にか、そこに友達がいた。たまたま、ここに来たのだからか。

芳美は、につこり笑った。その笑みには、心の底からの苦痛が少々蓋を持ち上げてこぼれていた。

「引き止めてくれてありがとう、洋子。でも、私にはこれしかないの。だから飛ぶ……私に意味というものを付けるために」

友達は、突如として走り出した。だが、芳美は、マンションの屋上から飛んだ。

電子辞書の画面が点いた。新たな意味が追加されたのだ。

じさつ【自殺】(名)スル

自分自身の命を絶つこと。

芳美の悲観

幸子の悲愴

美砂の悲嘆

篤子の悲痛

真奈美の悲哀

紀夫の絶望

大輔の自虐じぎやく 悠太の卑怯ひきょう 義郎の卑悪ひあく 典史の卑劣ひれつ 杏の隠滅いんめつ 真央の萎縮いしゆく 優奈の悶絶もんぜつ 彩香の所業しよごふ 正一の非業ひごふ 亞矢の不幸ふこう 康太の翻弄ほんろう 由美の愚劣ぐれつ 桜の愚弄ぐろう 裕介の愚考ぐこう 伸一郎の壊滅かいめつ 周一？の破綻はたん 美保の拒絶きよげつ 千香の耽溺たんでき 雅直の破滅はめつ 香奈恵の狂乱きやうらん 義典の狂気きやうき 勇一の墮落だうらく 博明の虚無きよむ 浩之の空虚こくう 優香の屈辱くつじやく 剛の汚辱おしやく 雅也の怨恨えんこん 健太の嫉妬しんと 忠広の苦惱くのう 芳樹の錯乱さくらん

他殺
英俊の疑念ぎねん
未紀の懷疑かいぎ

全存在忘却男

忘れっぽい男は、大理石の机一つを挟んで、スーツ姿の男と向かい合いながら座っていた。

「私は、今までたくさんのをなくしてきたんですよ。なぜかしら、忘れ物が多くてね」

「それなら、私も経験がありますよ。今月に入って、早速ハンカチ一枚をなくしましたよ」

スーツ姿の男が言うと、忘れっぽい男は力なく首を横に振った。

「それなら、まだ正常な状態と言えるでしょう」

「と言いますと？」

興味ありげにスーツ姿の男が聞き返し、忘れっぽい男は頷いて、彼自身の身に起きたことを語り始めた。

「私は少年時代の頃から忘れ物が多かったんですが、大人になる頃には、それはもう酷い状態になり始めたんですよ。あれは確か結婚して三年くらいになった頃、一歳半の娘と二十六歳の妻を持っていた至福の時でした」

「その時から、何が起こったと？」

スーツ姿の男が、話の続きを急かした。

「落ち着いてください。今から言います。その至福の時が到来するまでは、私の忘れっぽさはまだ通常の範囲でした。財布を落とすだとか、腕時計を落とすだとか、本をなくすとか、筆箱を紛失するとか、携帯電話を取りに一階へ降りて何をするのか忘れてリビングでお茶を飲むとか、降りる駅を二度忘れるとか、ですね。」

ほうほう、とスーツ姿の男が相槌を打つ。まだ話の先が見えてこず、少し彼はいらいらしていた。

「それで、あなたの疑問にお答えします。私が結婚して三年くらいになると、私の身から離れていくものが、単なる物だけではなくあったのです」

「例えば？」

「私の友人です」

「友人ですって？」

スーツの男が、素っ頓狂な声を上げた。

「まさか！」

「嘘と言ってもらっても一向に構いませんよ。私は、別にあなたに信じて欲しくてこの話が出たかったわけではありません」

「確かに。私達は、売主と買主の関係ですからね」

「ええ、まあ、そうですね。この話を聞いてから、私はあなたのものを買う、という約束でしたものね？」

「む？ ああ、そうだ」

スーツの男は、この忘れっぽい男を少し不審に思っていた。というのも、忘れっぽい男にアポをとられた記憶がないからである。

彼は多くの者から恨みを買われているので、殺されてもおかしくない状態なのだ。だからこそアポをとっていない者は、自分の客であつても絶対に会わない。この理論から言えば、今、目の前にいる客はもしかしたら自分を暗殺しにきた刺客なのかもしれないがしかし、自身の家のセキュリティは完全無欠だ。つまりとところ、この忘れっぽい男がアポをとっている人間と言わざるをえない。

それに、この忘れっぽい彼は、ちゃんとアポをとつたと言い張っている。大方、アポがあつたことを、自分が忘れてしまったのだらう。

「ああ、私も忘れっぽくなったものだ」

「え？」

「あ、いや、独り言だ。話を続けてくれ」

スーツの男が、さあ、と掌を上に向けた。

「私は先程も述べたように友人を失いました。いえ、その前に、私はまず会社の上司から失いました。最初は異動かと思っていたんですが違いました。この世から完全に消えたのです」

「なぜ、そう思うんだね？」

スーツの男が手を組み、そこに顎を乗せた。

「友人に前の上司はどこにいるのかな、と聞くと、何を言っているんだい、と言われたからです。最初は変なこともあるもんだ、と思っていたんですが、その友人すら消えてしまったのです」

少し頭がいかれているのだろう。今までの自分の客層は、大抵、トチ狂った輩が多かったから。スーツの男は自分の説に妙に納得した。

「さすがにここまでくると、あることを直感しましたよ。私は、物ではなく、人の方の、者を失い始めたのだと」

「はあ……。それで次は、どうなっただんです？」

スーツの男は、この手の客には調子を合わせておく方が無難だということを知っていた。

「私と関係を持つ者が、一人また一人、と消えていきました。そして、遂に私の知る人間は誰一人としていなくなりました」

「そうですか……」

スーツの男は困ったので、棒読みのような相槌になってしまった。どう反応すればいいか解らない。

「ともかく、私は新たに友人や知人を作るべきではないと考え、ただ、ただ、じつと一人で生きていました。幸い飢えて死ぬこともなければ、病気で死ぬこともありませんでした。なぜかしたら、私は私の周囲をなくすのに、自分自身をなくすことはできなかつたのです。そして、私は放浪を続けていました。道中、誰かに話しかけられることはありましたが、無視しました。なぜなら、話しかけて、その人が消えるのは気持ちの良いものではありませんからね。」

そうして、私が孤独に生きている矢先に、更なる不幸が起きました。核ミサイルが、私の国に撃ち込まれたのです。それは、それは、酷い有様でした。私の周囲の人どころか、それこそ目にしたことのない地方の者まで消えてしまったのですから。

しかし、爆心地にいながらも私は生きていました。これで、もう私は打ちのめされましたね。なんと私は悪い人間なのだろうか、と

悩んで、悩んで、泣き続けました。ですが、一週間くらいしてからのことです。待てよ、悪いのは私ではなく、そのミサイルを撃ち込んだ奴、そう、ミサイルを産み出した奴ではないか、と気付いたのです」

「ど、どういふことかね？」

スーツの男は、冷や汗が吹き出るのを感じた。

「私はこの忘れっぽさを使って、世の中を少しでも良くしようと考えたのですよ。だって、そうでしょ？ 私は私を失うことはできないし、かといって、このまま放浪していただけでは私の能力が悪い面においてしか力を発揮しないのですから」

忘れっぽい男はそう言ってから、スーツの男の肩をぼんぼんと叩き、そして彼の部屋を後にした。

わがままペットの飼育

男は、設備の整い過ぎた生活にうんざりしていた。各家庭には、いつでも決められた食事が決められた時間に出てくる。部屋の掃除も知らぬ間に全てされる。それに、何をするにしても便利すぎる気がした。気がつけば、妻がおり、娘がいた。順風満帆かに見えた。その時、大きな地震が起きた。父親はビクツとしたが、その地震もしばらく待てば消えた。

やるせない気持ちを紛らわすために、父親はある場所へと向かった。

ペットショップの店主は大いに自慢した。

「どうです？ この愛らしい姿。それに、尻尾。いかがでしょうか？」

父親は、愛娘のためにその愛らしいシマリスを買い与えようと考えた。そして、どうせならつがいで飼いたいだろうなと思いき、メスを買った。

父親が、帰宅し愛娘にそれを見せると喜び、「パパ、大好き」と言った。

それからというもの、愛娘はリスを大事に大事にした。しかしそれも長くは続かず、愛娘はいつしか餌と水しかやらないようになった。もちろん小屋の掃除もしたが、リスへの愛情は微塵もなくなり、ついには掃除や餌やりすらしなくなつた。そんなリスのオス・メスも両親となつた。子供が産まれたのだ。かわいいメスのリスだつた。父親は溜息を突き、餌と新鮮な水をやるのが毎朝の日課となつた。骨が折れることこの上ない。

「おい、×××。お前は、俺が世話をしてやっているのに感謝の一つもしないのか？ どうなんだ！」

父親は、檻の近くを思わず叩いてしまった。リスは、ビクツとしたが、しばらくするといつもの様子に戻った。

リスは、設備の整い過ぎた生活にうんざりしていた。各家庭には、いつでも決められた食事が決められた時間に出てくる。部屋の掃除も知らぬ間に全てされる。それに、何をしても便利すぎる気がした。気がつけば、妻がおり、娘がいた。順風満帆に見えた。

その時、大きな地震が起きた。リスはビクツとしたが、その地震もしばらく待てば消えた。

やるせない気持ちを紛らわすためにリスは、夜遅くになり辺りが静まり返ってから、ある場所へと向かった。

ペットショップのリス店主は大いに自慢した。

「どうです？ この愛らしい姿。それに、足。いかがでしょうか？」

父リスは、娘リスのためにその愛らしいノミを買い与えようと考えた。そして、どうせならつがいで飼いたいだろうなと思いオス、メスを買った。

父リスが、帰宅し娘リスにそれを見せると喜び、「パパ、大好き」と言った。

それからというもの、娘リスはノミを大事に大事にした。しかしそれも長くは続かず、娘リスはいつしか餌と水しかやらないようになった。もちろん小屋の掃除もしたが、ノミへの愛情は微塵もなくなり、ついには掃除や餌やりすらしなくなった。

父リスは溜息を吐き、餌と新鮮な水をやるのが毎朝の日課となった。骨が折れることこの上ない。

「おい、×××。お前は、俺が世話をしてやっているのに感謝の一つもしないのか？ どうなんだ！」

父リスは、檻の近くを思わず叩いてしまった。ノミは、ビクツとしてピョンピョンしたが、しばらくするといつもの様子に戻った。

「こらっ！ いい加減にペットの世話くらいしたらどうだ？ こんな大きくて立派な小屋とオス、メスを買って与えてやったというのに、今じゃ父さんしか世話をしていないじゃないか！」

父は、拳で小屋の近くを叩いた。小屋の中にいたペットがビクンと震えた。しばらくすると、いつもの様子に戻った。

「だってえー、ダルイんだもん！」

神様の父親は、溜息を吐いて地球を見た。

連鎖反応切腹

戦を避けてなんとか勝てないものか、と将軍は考えていた。

「皆の者、何か名案はあらぬか？」

それに対して、一人の武士がこう答えた。

「たとえ、敵といえども自尊心はあるでしょう。そこを突くのはいかがでしょうか？」

「ふむ。して、そちはどう突く？」

「この作戦では、必ず我々の内の一人が犠牲とならねばなりません。が、それでもよろしいか？」

将軍は、頷いた。

「では、申し上げる。敵国のあの憎き将軍の片腕のような武士一人をひっ捕らえ、誰かがその武士の影武者となるのです。そして何か仕事をしくじり切腹、残り一人はそれを見て私の責任だと言って切腹するのです。すると責任だと言って死んだ武士を見て、また誰か一人が切腹するでしょう。それを繰り返せば、敵国の武士は消滅します」

部屋にいた武士達は、うつむと唸った。卑怯極まりないやり口だと誰もが思っていたからである。

「お前という奴は……そのようなものが私の家来とは、許せぬ！ 誰かこやつを斬って捨ててしまえ！」

将軍が喚き立てると、

「どうか、拙者の切腹に免じて御許し下さい」

妙案を出した彼の傍らにいた武士が、切腹した。それを見て、次々と武士達が拙者の切腹に免じて、と言って切腹し始める。

敵国の将軍は、心苦しそうに笑った。

「なんとも不甲斐無い勝ち方をしたものよ」

「ですが、勝ちも勝ちです」

將軍に送りつけた二人の影武者が役目を果たしたのを、敵国の將軍は手放して喜ぶことができなかつた。

人間育成ゲーム

義郎がいつものようにぐうたら生活をしていたある日のこと、見知らぬ男が彼の部屋に降って湧いてきた。

「これこれ、義郎よ。お前は、その態度を改善する気はないのか？」

義郎はおったまげて、「誰だよ、お前！」と怒鳴った。

「うむ、いい質問だ」

男は顔色一つ変えずに、鷹揚に頷いてみせた。

「私は、お前を育成している者だ」

「育成？」

「さよう。私は人間ブリーダーというゲームに興じておるのだが、いかんせん、お前はぐうたらすぎる。友人達と対戦しても、たちどころにお前は負けてしまう」

何を馬鹿な、と義郎は反論しようとして、なるほど、この前の趣味のテニスも、営業成績も、大敗を喫したところだと思い出した。

加えて、この声はどこかで聞いたことがあった。いつも頭の中で響いていたような気がする。

「それは当然だ。私は、頑張つて今までお前を育ててきたのだからな。毎日、毎日、お前に忠告をしてきた。しかし、お前と来たらどうだ？ 忠告の一つも聞いてくれないではないか」

どうやら、この男の言うことは本当のようだ。

「お前は中学時代から、まるで駄目だった。勉学も、恋も、部活も、運動会も、体育祭も、何一つお前は勝ててこなかった。辛うじて受験は通ってきたが、それも無名なしよぼくれた大学ではないか？」

それに、この部屋の惨状をしてみる。汚すぎて足の踏み場もない。事実、義郎の部屋はゴミが散らかり、布団は敷いたまま、食器は洗わずに放置、といった有様である。

「う……」

「いい加減、私は腹が立ってきた。こんなにも基本ステータスの低

い人間なんぞを育てても面白くもなんともない。少しは努力したらどうだ？ 私の友人が育てている人間は、才能はそれほどないがしかし、努力はしているぞ？ ところが、お前ときたらどうだ？ 怠けてばかりいるではないか」

凶星だった。義郎は、ぐう、と小さく呻いた。

「このまま、お前が駄目な人間だったら、私はお前をリセットする」「リセット？」

「うむ、お前みたいな人間は要らんということだ。お前を消して、新たな人間を育てる」

「そんな！」

「では、努力しろ！ これからも、負け続けるようなら、私はリセットする！ ではな」

男はそう言い捨てた後、ふっと消えた。

これは大変なことになったぞ。義郎は、散らかり放題の部屋で腕組みをして唸った。

その日から、彼は死に物狂いで仕事に励んだ。所属しているテニスクラブでは、一球一球を意識して打った。

半年が経ち、義郎の営業成績は二位を大差で引き離しての一位だった。粘り強い交渉と優れた企画提案が、効いたのである。テニスクラブでも、クラブ内でベスト8に入るまでになった。それから更に十年後、彼は会社の社長となり、テニスでは全国大会出場者の常連にまでなった。

「これこれ」

義郎が就寝していたある夜のこと、またあの男が現れた。

「お前は、加減というものを知らぬのか？」

男は、しかめっ面をして言った。

「ど、どういうことですか？」

義郎はわけがわからず、聞き返した。自分は今までこれ以上にないくらい頑張ってきた。結果も残してきている。しかし、男の反応は芳しくない。

「お前は優秀すぎる」

「は？」

優秀すぎることのどこがいけないのか。義郎は、まるで理解できなかった。

「私が全く忠告できんではないか。これでは、ゲームが面白いもへつたくれもない。お前は、勝手にレベル100になる始末……。これなら、ぐうたらのお前を育てている時の方が、よほど楽しかったものよ」

そう言って、男はリセットした。

TPO仮面

出社の時間だ。正樹は、サラリーマンの仮面をかぶる。この仮面がないと、彼の営業成績は目も当てられない悲惨な状況になる。しかし、これさえあれば彼は一流の営業マンでいられる。それが、プラーボ効果かどうかは定かではないが。この仮面と出会ったのは、とあるインターネットのショッピングである。胡散臭い と思いつつ彼は購入し、そして見事素晴らしい効果を得たのである。

帰宅しようとしたところ、同期に飲み会に誘われた。正樹は、大学時代、常々、乗りの悪い奴だ、と揶揄されてきた。飲み会に行っても、正樹がいると、いまひとつ盛り上がり欠ける。だから彼はトイレに行き、サラリーマンの仮面を外した。そして鞆から飲み会の仮面を取り出し、かぶった。結果、飲み会は大盛況だった。

帰宅途中、車にひかれた。これは、大変なことになった。正樹は意識のある内に鞆から被害者の仮面を取り出して、かぶった。

車から人が降りてきて、運転手の仮面から加害者の仮面にかえているのが見えた。と思っただが、どうやら被害者の仮面をかぶっているようだった。あくまで被害者ぶるつもりでいるらしい。

気づくと、正樹は手術台の上に乗せられていた。

「わ、私は……私は……私は……手術は……できる」

執刀医らしき男が、自己暗示のように何度も そう言っている。「ええ、そうですよ、できます。できます。医師免許がないからってなんですか？ 今の時代、運転免許証よりも運転手の仮面を持つ人の方が多いくらいなんですから」

そう言っつて、隣の助手が執刀医の顔に、執刀医の仮面をかぶせた。

マイナス概念の美食家（前書き）

異常な美食家。今回は私にしては長めなSSSになってすいません。

マイナス概念の美食家

生前は異常な美食家としてその名を馳せた私だが、死んでしまっ
てはどうにもならない。今や、私はその辺りのなんの変哲もない霊
とまるで差がないはずである。しかしながら死因が過食とは、大変
滑稽というより、なんとも情けないことだ。

それにしても周囲の霊達が次から次へと転生していつているのに、
私だけなぜ輪廻の時間が回ってこないのであろうか、いよいよ疑問
に感じ始めた。少々心細い。

黄金色の雲の上で、ゆらゆらしていると、

「そのあなた。あなたは、吉田恵さんですね？」

唐突にそう尋ねられた。

声の方を見ると、見知らぬ男がいた。髪をポマードでしつかりと
固めている。燕尾服をまっとりっており、とても真面目そうな印象を受
けた。

「ええ、そうだけど、何か？」

「実は、食べてもらいたいものがあるんですよ」

下界では、大食い、早食いなどで、異常な美食家として轟いてい
た私の名だが、どうやら天界にも響いていたようだ。意外である。

どうせ、輪廻するまでは時間があるのだから、ということと、私
は二つ返事で承諾した。

「あ、申し遅れました。僕は、横山ケインと申します」

それは偽名か、芸名か、あるいはハーフか、と考えて、純和風な
容姿であるこの男に限っては最後の可能性はないな、と思い直した。
男の後についていくと、豪華絢爛な料亭に連れていかれた。柔ら
かな光が天井から、そして床からも少し漏れ出ている。

「今からあなたに食べてもらうのは、下界の負の要素です」

麩ぶの要素とは、これまた変わったものを食べてもらいたいのだな、
と思っていると、

「いいえ、味噌汁などに入っている『ふ』じゃないです。マイナスの負ですよ」

しかし、どうしてそんなものを食さねばならぬのか。

「この世を良くするためです」

「なるほど……」

言ってみれば、少し規模の大きいボランティアみたいなものか。

生前なら忙しくて、無償奉仕活動に参戦することはままならなかったが、今なら可能であるし、少しくらいならやってもいい気がする。

「ところで、その負とかいうやつはどんな料理なの？」

「見たらわかりますよ。今から料理を持ってきますんで」

料理を待っていると、ケイン君がお盆に、蓋付きの料理を乗せてやってきた。

「どうぞ」

彼は、それを机に置いてくれた。

早速、手を擦り合わせて、蓋を開けたのだが、途端に苛烈すぎるにもほどがある臭いが、私の鼻に殺到する。賞味期限をとうに過ぎたチーズにレモン汁を混ぜ合わせたような、激しく酸味の効いたような汚臭が鼻を突き上げる。まるで、鼻から直接キムチを吸い上げるような痛さがある。異臭とも汚臭とも判別がつかない。

たまらず、私は蓋を閉めた。

「まあ、その対応が正しいでしょうね」

「ど、どういうことよ！　こんなものを食べさせようとするだなんて、人としてどうかしているわ」

「私は人ではありません」

「じゃあ、何よ？　なんなのよ？」

「天界人です」

解答を聞いた私だが、天界人というのが何をするのかわからないし、そもそも人としてどうかしていると私が言ったのは、要約するに「あんたおかしいだろ」ということであって、人であろうがなからうがそんなことはこの際どうでもいいのである。

「と、とにかく、これはなんなの？」

「ですから、先程も言ったように、負の要素なんですって」

「これが？」

「ええ、これは『臭い物』なんですよ」

「そんなことは、わかっているわよ！」

だからこそ、蓋を速攻で閉めたのだ。

「ほら、よく言うじゃないですか、『臭い物に蓋をする』と」

ははあ。なんとなく話が飲み込めてきた。つまり、私の目の前にあるのは普通の料理ではなく、どちらかというと概念を具現化したような存在で、私が食べなくてはならない概念は、今回は負、つまり食べれば腹痛確定というような代物ばかりだというわけだ。

ボランティアに意欲的に挑もうとしていた私の気持ちは、掠れた音を立てて抜けていった。こんなものを食すのは、さすがに我慢ならない。

「いや、食べてください」

ケイン君は、困ったような顔をする。

「な、なんで、そんな負を食べなくちゃいけないわけよ」

私は、罪深い魂でもなんでもないはずだ。むしろ善行を積み重ねてきた。

「いいえ、あなたは意味もなく、テレビ番組で多くの生命を食べてきましたからね」

それを言われると、かなり痛い。けれども、あれは致し方なかったのである。そうするしかなかったのだ。

「あなたの主張も、もっともです。ですから負の要素を食べてくださいれば、ちゃんと輪廻するように取りはからっておきますから」

世の中、うまい話はないものである。仕方がないので、鼻をつまみながら食べようとすると、

「これは刺激臭ですので、嗅ぎ方としては手で仰ぐのが正しい流儀かと」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

そもそも、こんな得体の知れぬ臭いを吸い込みたいうつけがどこにいるというのか。いや、この男はそれに該当しそうである。

私は鼻をつまみながら、フォークで『臭い物』を食べ始めた。味は極めて不味いものを予想していたが、そういうこともなかった。結構辛くて、口の中を針で突っつき回されるような感触がのたうち回る。もっとも、激辛にも強い私だから、そこは無問題である。だてに美食家を自負してきたわけではない。それに、これを食べることで、下界の隠されるはずであった悪事や醜聞を排斥できる、と思うと、不思議と料理も美味しく感じられてくる。

臭い物を食べ終わると、ケイン君は、新たな料理を持ってきた。「今回の料理は、ちよつと……犬の餌として下界から取ってきたんですが……」

ケイン君が口ごもる。

全く。犬の餌を私に食べせようとするなんて、モラル欠如にもほどがある。私が、今後の彼のためにも、一肌脱いで常識を教えてやるうではないか、と腕まくりした。

「ぶつちやけた話、犬も嫌いなんですよね、その料理」

私は、まくり上げた袖を元に戻した。おそらく、私では彼の更正は不可能だろう。

料理を嗅いでみると、臭くはない。見た目もそんなに悪くはない。犬の餌にも見えないし、犬には少しもつたいないような気さえしてくる。

どうして食べないのだろう。味が問題なのか。おそろおそろ一口だけ食べてみると、冷たい味がした。凍らしたバナナだがしかし柔らかくなってきている食感、といえいいのだろうか。不味いといえは不味いかもしれないが、好き嫌いの問題の範疇である。

「それで、これはなんなの？」

「ええ、それは『夫婦喧嘩』というやつです」
なるほど、道理で犬が食わないわけである。

しかし夫婦喧嘩を下界から抹消するとは、少々そら寒いものを感じ

じてしまうのは、私がおかしいからであろうか。やはり、夫婦とは喧嘩によって互いを研磨し、互いを知り、互いに成長しあっていくものではなかるうか。未婚の私が、何をどうこう言おうが、あまりその言葉に重みはないのかもしれない。

「ねえ、夫婦喧嘩は」

必要なものじゃない、と言おうとしたところ、

「排除すべきです。僕は、最近、大喧嘩の末、愛妻と離婚するに至りましたから」

そんなことを言われては、とてもではないが、夫婦喧嘩は必要だ、と論じることはできなくなってしまった。

その代わりに、「じゃあ、はい次」と私が威勢よく言うと、「少々お待ちを」とケイン君が慌てて厨房に向かった。

ややあつてから、彼は「お待たせしました」と次なる料理を持ってきた。

三番目の負の要素は、かなり見栄えの良いものであった。食べてみると、とても美味である。あまりに美味しいので、どんどん食べてしまい、僅か数秒で完食してしまった。

「昇天しそうなほど美味しいわね、これ」

「吉田さんは、すでに死んでいますから」

「失礼ね」

ケイン君は、言語の裏を解する心に優れていないのだろう。先程から、どこかずれた発言が目立つ嫌いがある。

「とても美味しいね、これ。一体、これはなんなの？」

尋ねてみるも、ケイン君はもじもじしたままで答えくれない。本当にこの男は、一体なんなのか。まるでつかみどころがなく、素手でウナギを捕まえようと苦心していた子供時代を想起する。

「早く答えてよ」

と何度かせつつくと、

「それは『人の不幸』というやつでして……」

思わず噴いた。

それから、沈黙した。

人の不幸は美味しい、というのが、私はそんな悪人になったつもりは毛頭ない。

気まずい沈黙の中、ケイン君は無言で、またも厨房の方へ直行していった。

しばらくして帰ってきた彼は、しきりに首をひねっている。

「しかし、これって……」

何やらもごもご言っているケイン君の手から、私は料理をひったくった。

もしかして、またとんでもなく美味なものかもしれない。口の中で唾液が広がる。

口に料理を運んでみると、曖昧なイメージが脳裏に浮かび上がる。心がとても快適だ。好奇心も湧いてきた。

けれども、これがなんであるか思い出すことはできない。なんだろうか。

「よく、そんな大きいものを食べることができね、おばちゃん」

いつからそこにいたのだろう。見知らぬ少年が指をくわえながら、私を凝視していた。

「おば……」

この小憎たらしい坊やの首をひねって、もぎ取ってやりたい衝動に駆られた。が、ここはぐっとこらえねばなるまい。そんなことをしでかしたら、確実に私は地獄行きの切符をつかまされる羽目になるのだから。

「どうして、そんなに大きいものを食べることができるの？」

「それは、私が」

大食いチャンピオンだからよ、と答えようとしたのに、

「大人だからです」

とケイン君が、静かに、そして厳かに主張した。

「それは、『夢』なんですよ」

「夢……」

私は無意識に繰り返した。

「そう、夢です。子供の頃は大きいのに、大人になってみると案外小さくなるものです。ですから大人のあなたにとっては小さなその料理も、子供の彼にとっては大きく見えるんです」

「で、でも、どうして、私が夢を食べなくちゃいけないの？ 私は負の要素を処理して、この世を良くするんじゃないの？」

「ええ、そうです。私もどちらかというと、吉田さんの意見に賛成なんです、いかにせん上司達は、今の世には夢にかこつけてフリーターやニートになるものがあまりに多い、これではいかん、という考えを持っているんですよ」

「なるほど、夢は人を駄目にする、か」

「まあ、そんなところですよ。では、次に行きましょうか」

まだあるのか。正直なところ、胃袋の容量的には全然問題がないのだが、先程から食べたことのないものばかり食べてきているので、なんとというか胃がむずがゆいのである。しかし、決して食べられないわけでもなく、免罪符をもらうためにも私は食し続けなくてはならない。

「それでは、こちらをどうぞ」

私が思索にふけっている間に、ケイン君は次の料理を持ってきていた。

「おっと、これは食べてはいけませんよ。持ってくるものを間違えてしまいました」

彼は慌ててその料理を引っ込めようとしたが、それを見てみるとどうしても食べたくなるというのが人の性であり、美食家の使命でもある。

「僕は人じゃないですから」

って、別にケイン君の性について述べていたわけではないから。

私は、ケイン君の手にある料理を一口だけつまんで食べてみた。

「っ、冷たい……」

あまりにも冷たい。まるで冷凍食品をそのまま口に放り込んだか

のようである。

「そりゃそうですよ、今から電子レンジ解凍しなくちゃいけない代物なんですから」

「どうやら、真剣にこれは冷凍食品の類だったようだ。」

「ひりひりする舌を、手近にあったお茶を飲むことで癒している間、彼はよくわからない料理の解凍に取りかかっていた。」

「それで、そいつはなんなの？」

「義理人情ですよ。今では、すっかり冷たくなっちゃって」

「ふうん」

「私は完全に冷たさが残って違和感のある舌を指でいじっていて、うっかり喉に触れてしまった。」

「う……」

「胃の不調と合わさって、たまらず私は今まで食べてきたもの全てを『戻し』てしまった。」

「ああ！　なんてことを！　結局、この世は元に『戻って』しまっただじゃないですか！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331j/>

ショートショートの間

2011年11月11日06時33分発行